# ６［小説］　　『の空』

　官房長官になって初めての帰郷は熱烈なａカンゲイに囲まれた。ひそかにホッとしたい希望はえられるべくもない立場なのだった。

　それでも、樹木の茂り方が濃く、光線の具合によっては紫のように見える山の姿や、昔の街道の古びた並木の風情、里山に登れば、ずっと段々畑が降りていく光景はに元気を与えた。子供の頃、ただ辛らい作業として記憶されている水田の雑草取りさえも懐しい思い出であった。日射しはまだ夏であったが、空はもう澄んでいた。

　【Ⅰ】里山の中腹までｂテンカイしている実家の畑の周辺には、が作ったと言われているがいくつかあった。その水をに汲んで水のれたの稲の一束一束に注ぐ作業は、雑草取りに劣らぬ苦役であったし、その季節の後のを編む作業も、子供の掌が傷だらけになる厳しいものだった。正芳はしい陽射しに目を細めるようにして稲田を見ていた。【Ⅱ】すると、腰を伸ばした母が、姉さんりをしたいを取って、

「正芳、よく帰って来たなあ」と声を掛けた。さっき①墓参りをした時は無言で、ただ大理石の墓だけが太陽を反射していたのに、母は畑に現れたのだった。

「お母ァ、帰って来たでー」と彼は心のなかで応えていた。②サクの生前、正芳の気持は必ずしも彼女に寄り添ってはいなかった。五歳になった時、彼は生家から少し遠い家に里子に出された。表向きは、村の世話役をしていた父の代りに母親が働く必要があり、子供の教育がおろそかになるから、ということであったが、幼い正芳は納得できず反抗して③養家で思いつく限りの悪戯をし、もてあました養家は農繁期が終ると、そうそうに彼を実家に送り返したのであった。

　この記憶は正芳に母親に愛されていなかったという想いを残していた。【Ⅲ】そのサクは敗戦直後の八月二十八日に七十二歳で死んだ。日本中が最も貧しくｃヒヘイしていた時だった。正芳は津島蔵相の秘書だったから自由がきかず、義父に代理出席してもらった。

　今度帰ってきて、親戚の一人から母の死因は栄養失調だったと聞いた。酒好きで社交家の夫をって家計を切り盛りしなければならなかったサクを「本当にｄ健気なお人やった」と述懐する者もいた。【Ⅳ】なかでも臨終の床で、「『正芳はしっかり者や、生れた時からとった。正芳を頼まいな』と言うとった」という話は彼をｅ粛然とさせた。

　母は冷たかったのではなく、里子に出されたのも獅子が子を谷に落すというを実行したのかもしれない。また、今のうちに他家に出せばいを減らすという計算もあっただろうか。そこに母の哀しさがあった。

　正芳は五十にもなってはじめて母の想いが目の前に見えてくるようなのをいくらか不思議に感じながら、細い目をさらに細めて跳ね返る陽光のなかの母を見ていた。

　【Ⅴ】彼女はまた腰をめて作業に戻り、時おり腰を伸ばし、幅広の帽子を脱いで、首に掛けていた手拭で顔の汗を拭いている。正芳は自分が悪戯をしたのは母の関心を引きたかったからなのだが、それがどれくらい通じていただろうと考えてみた。分っていたけれども、④いつもそれどころではなかったというのが本音だったのかもしれないと、はじめて母親に寛容になっている自分を感じながら思った。

問１　本文の季節と、その根拠となる箇所を抜き出せ。（3点＋5点）

季節［　　］根拠［　　　　　　　　　　］

問２　傍線部①とは誰の墓参りだったか答えよ。（6点）

［　　　　　　　　　　］

問３　本文を大きく二つに分けるとすれば、【Ⅰ】〜【Ⅴ】のどこが適当か。また、その理由を答えよ。（3点＋6点）

記号［　　　　　　　　　　］

理由［　　　　　　　　　　］

問４　傍線部②とあるが、その理由を答えよ。（7点）

［　　　　　　　　　　］

問５　傍線部③は、どのような思いからなされたか。本文中から一五字以内で抜き出せ。（6点）

　　〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問６　傍線部④と「正芳」が考えた理由を説明せよ。（7点）

　　〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問７　本文の説明として最も適当なものを次から一つ選べ。【読みのセオリー】（7点）

ア　正芳の母との対立の記憶が、故郷の風景を眺めていくなかで徐々に解消されていく。

イ　久し振りの故郷の風景のなかで、正芳は幼い時に母に疎まれて里子に出されたことを思い出している。

ウ　故郷の風景のなかで、正芳は母の葬儀にも行けなかった後悔から、幼時の母の記憶をたどっている。

エ　懐しい故郷の風景のなかで、正芳の母に対する思いが変化していく様子を回想と幻想を交えて描いている。

オ　官房長官になって帰郷した正芳は、畑に現れた亡き母との会話を通して、母の人生を受け入れている。

　　〔　　　〕

【解答】

漢字　ａ歓迎　ｂ展開　ｃ疲弊　ｄけなげ　ｅしゅくぜん

問１　季節＝秋　根拠＝日射しはまだ夏であったが

問２　母（サク）

問３　【Ⅱ】

　　　理由＝母の幻影の出現により、正芳は母を回想していくから。

問４　母に愛されていなかったという想いを持っていたから。

問５　母の関心を引きたかったから（13字）

問６　村の世話役をしていた夫に代り、家計を切り盛りすることに忙しかったから。

問７　エ

●語注

官房長官＝内閣官房長官

正芳＝正芳。のちの第68代・69代内閣総理大臣。

麦稈真田＝麦わらを平たくつぶして、のように編んだもの。麦藁帽子などの材料とする。

■覚えておきたい語句

□16もてあます……………どう扱えばよいかわからなくて困る。

□22述懐……………心の中にある思いを述べること。

□24粛然……………かしこまるさま。

□32寛容……………受け入れる広い心を持っていること。

【読みのセオリー】

★場面を読む

　小説の読み取りの基本は、場面を正確に読み取ること。小説の読解の三要素、時・場・人物の変化（入れかわり）に着目して場面の変化を読み取ろう。

◆漢字　本文中の二重傍線部ａ〜ｅのカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで記せ。

ａ〔　　　　　〕　ｂ〔　　　　　〕　ｃ〔　　　　　〕　ｄ〔　　　　　〕　ｅ〔　　　　　〕

【現代文読解用語200】

問　次の言葉の意味をそれぞれ漢字で答えよ。

㉗モラル＝㉘［　　］

㉙カオス＝㉚［　　］

㉛ロジック＝㉜［　　］

㉝プロセス＝㉞［　　］

㉟セオリー＝㊱［　　］

㊲メタファー＝㊳［　　］

㊴フィクション＝㊵［　　］

㊶フィロソフィー＝㊷［　　］

【解答】

㉘道徳　㉚混沌　㉜論理　㉞過程　㊱理論　㊳隠喩　㊵虚構　㊷哲学

〔場面解説〕

第一次池田内閣の官房長官になった正芳が故郷に帰り、母の墓参りをする。その後、故郷の風景の中で、母との来し方を思い出す。そこで、母に寄り添えない感情を抱いていた正芳が、母に寛容さを持つように変わっていく。

〈作者＆出典〉辻井　喬（つじい・たかし）一九二七（昭和２）～二〇一三（平成25）年。東京都生まれ。詩人・小説家。元セゾングループ代表・としての活躍が知られる。その一方で、詩・小説の両方で精力的に創作活動を展開した。詩集『異邦人』で詩人賞、詩集『群青、わが黙示』で高見順賞受賞。小説では、『虹の岬』で谷崎潤一郎賞、『父の肖像』で野間文芸賞を受賞。本文は、『茜色の空―哲人政治家・大平正芳の生涯』（文春文庫、二〇一三年）より。

☆「セオラム　補充問題」問題は次の３種類があります。

　＊差し替え　　　……　当該の問と差し替えるもの

　＊追加　　　　　……　同じ問いで追加された問題

　＊新問　　　　　……　追加が可能な新たな問題

＊新問

問　15〜16行目「幼い正芳は納得できず」とあるが、何に納得できなかったのか。10字以内で答えよ。

［答］里子に出されたこと。

＊新問

問　「正芳」の説明として最も適当なものを次から選べ。

ア　母親に愛されなかったという想いを持ち、結果、母親の葬儀にも自分は出席しなかった。

イ　官房長官になったことを少し誇らしく思っており、それを母親に報告するために帰郷した。

ウ　五十になり、はじめて母の想いがわかるようになり、母親に対し寛容な思いを抱いている。

エ　幼いとき、思いつく限りの悪戯をし、母親は正芳をもてあまして冷たくあたるようになった。

オ　官房長官になっての久し振りの帰郷で、母親と対面し、おかげで母親への誤解が解けた。

［答］　ウ

■小説の場面把握　★時・場・人物・事件は小説の基本

《　時　》　現代（一九六〇年）。秋。

《　場　》　正芳の故郷（香川県観音寺市）

《人　物》　大平正芳

　　　　　　正芳の母・サク

《事　件》　官房長官になった正芳が故郷に帰り、故郷の風景のなかで母のことを回想している。